

日本音楽学会 2023 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

一節切尺八・琴・三味線・歌で奏でる「江戸期の音楽」

報告記

加藤 いつみ

今回は、2023 年 12 月 13 日、中部大学三浦幸平メモリアルホールで開催した「江戸期の音楽」について報告します。その内容は、2023 年に中部大学より授与された博士学位論文「一節切尺八の研究」に基づいたものです。

一節切尺八（以下一節切と略記）は、今は吹く人はほとんどありませんが室町後期から江戸中期に盛んに吹かれました。信長、家康などの武将や後水尾天皇も吹いたようです。名古屋近辺では家康が幼少のころ吹いたと伝わる笛が岡崎市本宿の法蔵寺に 1 本、その他、熱田神宮の宝物殿に 1 本、徳川美術館に 3 本保存されています。まだ国内には、多くの笛が残っているようです。

また、1608 年には『短笛秘伝譜』という一節切の手（一節切の独奏曲のことを手といいます）、奏法、歴史などが手書きされた譜書が刊行されています。著者である大森宗勲（信長に仕えた小姓といわれています）は、信長の死後一節切に没頭し、当時吹かれていた手を収集して何冊も譜書を書きました。その譜書は、一節切の衰退してしまった今日にあっては貴重な存在となっています。

今回の演奏会では、一節切で吹かれた①本曲、②わらべ歌、③三曲合奏曲、④小歌（流行歌）の 4 つのジャンルに分けてその再現を試みました。①本曲では、『短笛秘伝譜』から独奏曲「ひしぎ」「きり」の 2 手を飯田勝利氏の解説を交えた独奏。②わらべ歌は、一節切の二重奏と歌を交えて「ひらいたひらいた」「かごめかごめ」の 2 曲、③三曲合奏曲は、箏・三味線・一節切の 3 つの楽器で「りんぜつ」「すががき」の 2 曲、④小歌では当時の流行曲である「吉野の山」「近江おどり」「おかざき」の 3 曲を奏でました。

今回の目的は、江戸期において一節切がどんな奏法でどんな手や曲を吹いたのか、実際に音にすることにより、この楽器の紹介・復活に繋げるものでした。聴衆は、一般人、付属の高校生・大学生も含めて 270 名程の来場がありました。評価もまちまちでしたが、解説があつてよく理解できたという人と、普通のコンサートと思って出かけたら、研究発表みたいなコンサートで溶け込めなかった等いろいろありました。嬉しいことに、大学から「来年も学生対象か外部を入れるかわからないが実施して欲しい」という依頼が入り、研究が継続できることに喜びを感じています。

「学会」からいただいた助成金は有効に使わせていただきました。ありがとうございました。